

未熟室における母子接触

多 田 裕（東京都立築地産院小児科）

未熟児は入院期間が長くなることから、母子の接触が十分でなく、退院後の母児関係に異常を来すことがあるとされる。

我々も以前、未熟児網膜症で失明の恐れがある超未熟児を退院させたところ、退院後直ちに感染症をおこし再入院となり、再び退院させたところ、その日の夜に母親が心中を図るという痛ましい事例を経験してしまった。

そこで、未熟児がいかに重症であっても、積極的に母児接触を行わせることとし、出生直後に両親と面会させる方針とした。また保育器内の児に直接手を触れさせるとともに、母親が退院後は自宅にて母乳を搾らせ、凍結して毎日病院に運ばせ、早期から育児に参加しているという意識を持たせるようにした。また、面会日には、両親を未熟児室の中に入れ、児と接触をはかった。

医療側の対応としては、重症児に対しては看護婦の中に受持を決め、受け持ち看護婦が受持医とともに両親に対応することにより、入院中の児と両親の間を繋ぐ役目を果たすこととした。またノートを用意させ、児側（受持看護婦）と両親側とで経過や感想を自由に書いて意志の疎通をはかった。

さらに産科側からは、超音波画像などを通じて胎児を認識させ、分娩前から母親と児との結びつきを強めるように試みた。

初年度は、このような方法を実施し問題点を把握し、次年度以降に、アンケート調査を行い、その効果を明らかにする予定である。

昭和58年度研究報告

昭和58年度には、以上の方法により母児の早期接触を図った。

感染症などの両親入室による弊害は臨床的には認められず、両親は児への面会日を楽しみに待ち、当日は期待と不安の混じった気持で病院に急ぐ有様がノートより明らかになった。

このような積極的な母子接触は、後遺症が残りそうな重症児、重症奇形児、出生体重1500g未満の極小未熟児などを対象に実施し非常に効果的であったが、逆にこのような対象とならない比較的体重の大きい児の親がこれらうらやましがるという面もあらわれ、早期の母子接触の効果が明らかになった。

今後は、プロジェクトⅥの「育児に関するアンケート」調査用紙を利用して、これらの効果を明らかにしていく予定である。